

未熟さも、いたらなさも、すべてがお互いの必要性から起こり、
それぞれが自分の内側と向き合い、
いつのまにか変わっていった姿をたくさん見させてもらった。
そう、たくさんのギフトをもらったのは、僕だった。
プロセスを信頼すること、経験と場を信頼することの力を、
心から確信させてもらった8年間だったと思う。

ありのままの自分を受け入れること、
ありのままの相手を受け入れること、
評価も批判もなく、聴くこと、
謙虚に、ていねいに、自信をもって、伝えること、
あなたとわたし。
対等に、オープンに。



ちへ

書けば、なんてことないことだけど、
なんて深いだろう。
そして、自分に向かい合った分だけ、なにかを握りしめている自分に気づく。
脱いだ衣の分だけ、かるやかに自分になっていく。

子育ての前半、子どもが小さい頃がよくそうであるように、
てらこやの初期も、余裕がなく、できてないことばかりだった。
じゃあ、その頃の子どもたちが今、変になっているかというと、
ぜんぜんそんなことない。
卒業生たちは、みんな生き生きと、自分を見つめながら、
なんかすてきにそれぞれが今を生きている。
毎年、卒業生が集まってくれたり、顔を出してくれたり。
ここ、地球子舎が彼らの帰る場所になっている。
自分のありたい周波数を再確認する場にもなっている。
それがなによりうれしいこと。
自分は自分でいいんだ。
そんな場と経験が、人生の根っこにある。
迷っても、見失っても、戻ってこれる。
それを確かに手渡せたのだと、
今いる子どもたちが、特に卒業生たちが、みせてくれたこの数年。
僕も、スタッフも、親たちも、
こう育ってほしいという希望が確信に、
こうでよかったんだろうかという不安が安心に、
変わっていった数年でもあったと思う。
すべては、子どもたちのおかげだ。
そして今までのすべてにも、
ありがとう。



みし

さて今年は、どんな化学反応が起こるだろう。
9年目の春が始まる。

